

SEN GARI
千苅遺跡の研究



1990

飯山市教育委員会

SEN GARI
千苅遺跡の研究

1990

飯山市教育委員会

序

飯山市教育委員会

教育長 浦野昌夫

長野県飯山市は、長野県の北端、千曲川の最下流に位置しています。市の中央を流れる千曲川は、遠い昔から変わらぬ流れを見せて新潟県へ入り、信濃川と名を変えて日本海に注いでいます。飯山市は、この千曲川によって形成された肥沃な平地を中心として発展しています。

一方、飯山市には原始・古代の遺跡が多いことでも知られています。最近の開発ラッシュによって多くの発掘調査が実施され、記録としての報告書もその都度発刊しています。

今回の千苅遺跡の調査は、個人住宅建設に伴うものでしたが、幸いにも関係者より深いご理解をいただくことができ、事前に記録保存としての発掘調査を実施することができました。

從来より千苅遺跡は、旧石器～繩文時代草創期における重要遺跡として考えられています。この報告書が、こうした研究の一助となることを祈念するとともに、多くの市民の皆様が埋蔵文化財に対する理解を深めるうえで参考になることを願うものであります。

最後になりましたが、今回の調査にあたってご尽力頂きました関係各位に厚く感謝申し上げ序といたします。

平成2年3月20日

例　　言

- 1 本書は、長野県飯山市大字瑞穂字千苅に所在する千苅遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は個人住宅建設に伴い、飯山市教育委員会が経費を負担し、平成元年7月24～25日の2日間実施した。
- 3 調査関係者は以下のとおりである。

調査指導 高 橋 柱（日本考古学協会会員）

担当者 望月 静雄（飯山市教育委員会事務局職員）

事務局 浦野 昌夫（飯山市教育委員会教育長）

佐藤 清（飯山市教育委員会教育次長）

渡辺 博（飯山市教育委員会社会教育係長）

樋山 二二子

調査参加者 池田盛 湯本竹房 佐藤重太 小林としみ 宮崎俊夫 竹田美作

岡本実 岡本唯行 小林秀子

- 4 本書には、千苅遺跡の既出資料の検討を、東京都多摩市教育委員会の中島庄一氏に依頼し、研究編として掲載した。
- 5 本書の編集は、飯山市教育委員会事務局が行った。なお、文責は目次に記してある。
- 6 既出資料を含めて、千苅遺跡の資料等は飯山市教育委員会が保管している。
- 7 発掘調査から報告書の刊行において下記の諸氏・機関より御協力を賜った。記して感謝申し上げる。（敬称略・順不同）
畔上光雄・南瑞老人クラブ・飯山市同和対策課

目 次

序 例 言

調査 編

第1章	遺跡の位置と環境	望月静雄	3
1	遺跡の位置と地形		3
2	遺跡の考古学的環境		5
第2章	調査の経過		11
1	調査経緯		11
2	調査概要		12
第3章	調査の結果		13
1	旧石器時代		13
2	平安時代		17

研 究 編

千刈遺跡の既存資料	巾島庄一	21
1 はじめに		21
2 千刈遺跡の石器		21
3 千刈遺跡既存資料が提起する若干の諸問題		22
4 まとめにかえて		25
結語	高橋 桂	33

挿図・表目次

調査 編

1図	遺跡位置図		3
2図	周辺地形分類図		4
3図	旧石器時代遺跡分布図		6
4図	周辺遺跡出土旧石器実測図 1		8
5図	周辺遺跡出土旧石器実測図 2		9
6図	調査区全体図		11

7 図 旧石器時代遺物分布図	13
8 図 出土遺物実測図	14
9 図 1989年採集石器実測図	15
10図 遺構実測図	17
表1 千苅遺跡周辺旧石器時代遺跡地名表	7

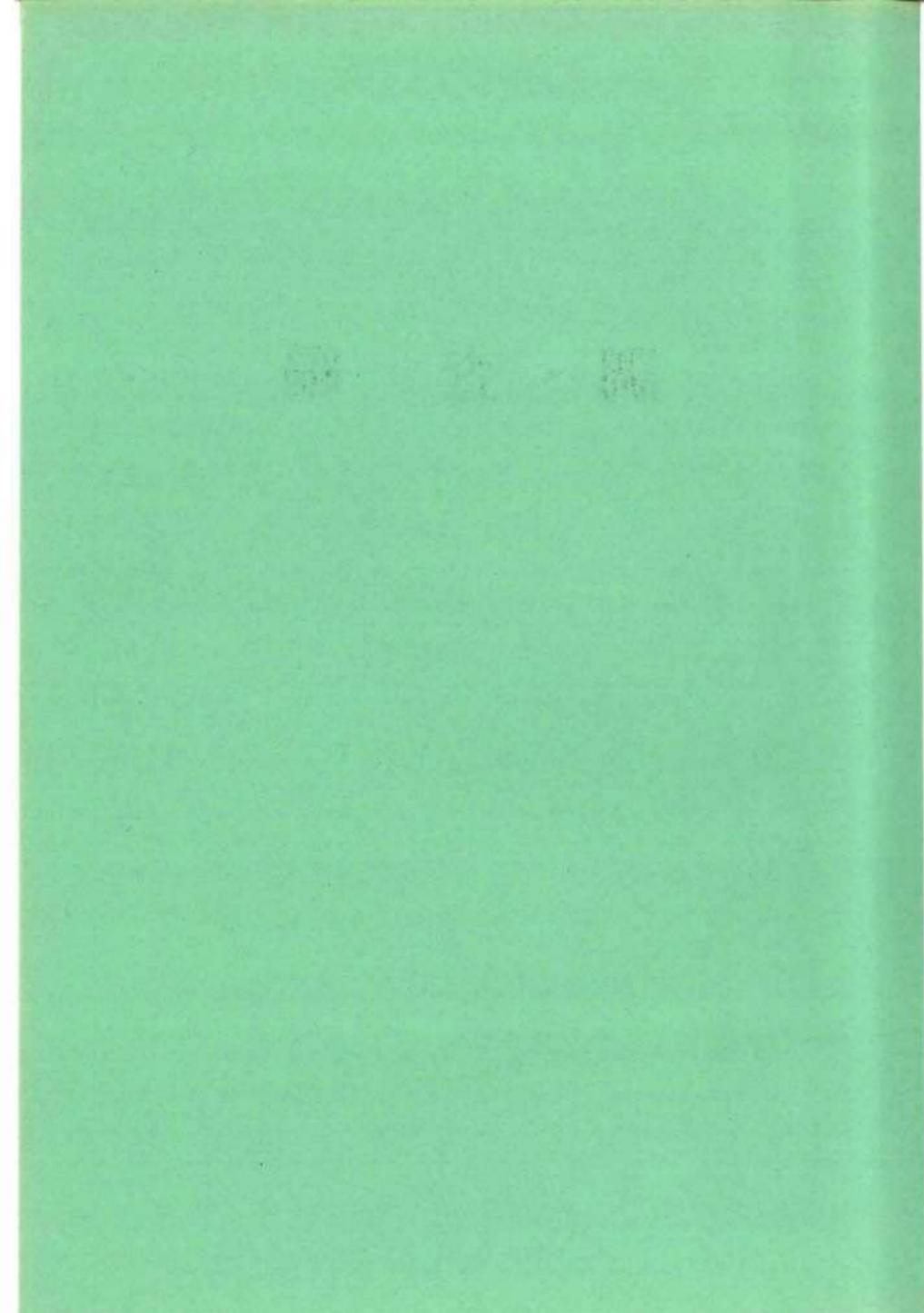
研究編

1図 既出石器実測図 1	27
2図 既出石器実測図 2	28
3図 既出石器実測図 3	29
4図 既出石器実測図 4	30
5図 既出石器実測図 5	31
6図 既出石器実測図 6	32

写真図版目次

P L 1 千苅遺跡近景	34
調査風景	
P L 2 平安時代の遺構(P ₁)	35
平安時代の遺構(P ₂)	
P L 3 調査区全景(西より)	36
既存資料	

調查編



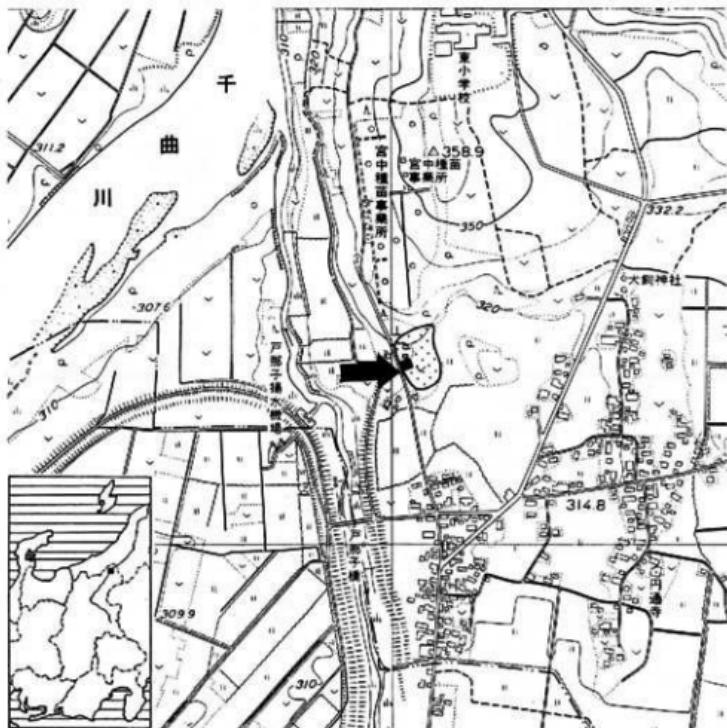
第1章 遺跡とその環境

1 遺跡の地理的位置

千苅遺跡は、長野県飯山市大字瑞穂字千苅に所在する（1図）。

甲信国境に源を発する千曲川が信濃に残す最後の平が飯山盆地である。飯山盆地を過ぎると千曲川は、信越国境の狭谷地帯を下り曲流しつつ新潟県津南町に至り、ここで信濃川と名を改め、いわゆる津南段丘群を形成しやがて日本海に注ぐ。

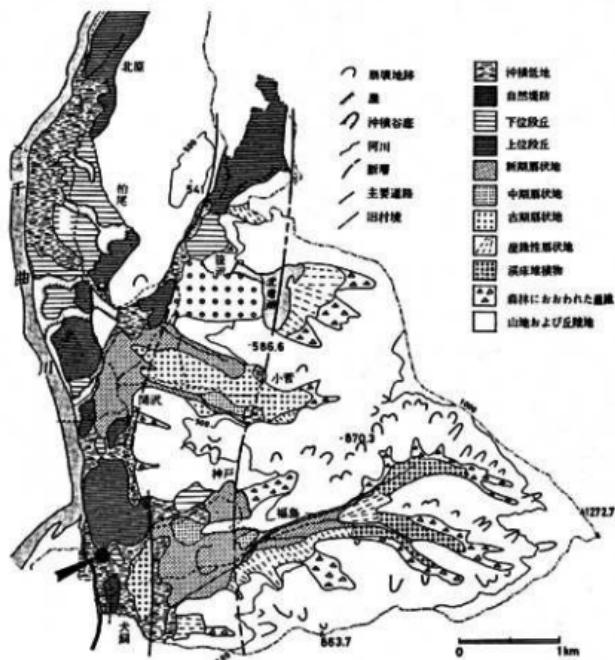
飯山盆地西縁は、黒岩山（938.6m）、鍋倉山（1288.8m）等比較的低い関田山脈によって画されている。ここには越後に通ずる幾つかの峠道が存在している。一方、東縁は毛無



1図 遺跡位置図

山(1640.98m)等三国山脈の支脈によって、また断層構造線の横走によって急峻な山地で
画されている。平地は、盆地のほぼ中央を流れる千曲川によって東西に二分される。西側は、飯山市街地北方より戸狩地区に至る長さ7kmに及ぶ長峰丘陵を介在させて常盤平・外
様平が平がり、当地の最大の穀倉地帯となっている。東側は、その南半にかつての千曲川
氾濫原である木島平が広がるが、千曲川が東縁に近接するにしたがって、段丘・丘陵等の
微高地が開析谷を隔てて連続的に連なるという複雑な地貌を呈している。そしてこれら微
高地上には幾多の遺跡が存在している。千苅遺跡もこの微高地上に立地している。

千苅遺跡は、千曲川が盆地のほぼ中央において、東縁に近接し権川と合流する地点の宮
中丘陵南端に位置する。宮中丘陵は千曲川の上位段丘であるとされ(2図)、遺跡はそれに
接した下位段丘面にのる。現千曲川との北高差は、上位面が約40m、下位面が約15mであ
る。千苅遺跡は標高320m付近にあり、緩く東・南・西側に傾斜している。主体部は平坦
面より東斜面で、低湿地に続く面に存すると思われ、今回の調査対象区は、南西斜面にあ
たる。西側は権川堤防によって区画されているが、急斜面で氾濫原に接する。



2図 周辺地形分類図(小泉 1980)

2 考古学的環境

A 千苅遺跡の概要

千苅遺跡は、平安時代の土器片等を出土する遺跡としては既に信濃史料において記載されている（1956 信濃史料刊行会）。ただし、旧石器時代の石器と確認されたのはずっと新しくなり、昭和40年代に入ってからである。高橋桂は『飯山の歴史と自然』の中で初めて旧石器時代の遺跡として千苅遺跡を紹介している（高橋 1974）。以下に引用しよう。「樽川が千曲川に合流する地点、宮中丘陵の南端に位置する。千苅在住の畔上光雄氏屋敷畠がそれである。遺跡は東に向かってやや傾斜を示している。遺跡の範囲は1200平方メートル位であろうか。畔上氏のご子息、直君が丹念に集めたものである。飯山市新発見の遺跡である。時代的にはナイフブレイド、マイクロリス、ポイントの時期にわたっている。採集品のため出土層位は明確でないが、ローム層中に含まれることは事実である。石器の種類は多種多様である。今後、詳細な研究を通して文化内容をきわめると同時に大事に保存したいものである。市の貴重な遺跡の一つである。」

採集された石器及びその後採集した石器については、畔上氏より高橋にもたらされ、中島庄一によって資料が公開された（中島 1981）。中島はその論文のなかで、飯山地方の尖頭器を伴出する石器群の時間的な位置づけについて①小坂石器群→②関沢石器群→（細石器）→③千苅石器群→④横倉遺跡とし、千苅遺跡の細石器と尖頭器の同時性については地域的な様相もあって一概に結論づけられないとした。

また、長野県史においてもほぼ同様な見解が示され、「細石刃核と共伴するかどうかの微妙な時期にある槍先形尖頭器を主体とする石器群である。」とされている（森島 1988）。

なお、千苅遺跡をのせる微高地東側には大飼館跡の小丘が低湿地を介在させて存在している。本来の地形はノッチ状につながる段丘であったと考えられ、千苅遺跡の範囲が大飼館跡まで広がる可能性もある。現状は植林されており詳細は不明である。

B 周辺の旧石器時代遺跡

千苅遺跡周辺の3km四方において、11遺跡の旧石器時代もしくは縄文時代草創期の石器群が発見されている（3図）。小項ではこれらの遺跡群について概要を触ることとする。

城ノ前遺跡（2） 千苅遺跡の東方500mの段丘に位置する。中組地区在住の小林英雄氏が丹念に採集されたものである（4図）。石器はすべて尖頭器で組成は不明である。千苅遺跡の尖頭器に比較して平坦な加工が施され、全体的に薄手となっている。

木原遺跡（3） 曾根川によって形成された扇状地上に位置するが、詳細な地点は不明である。福島地区の森山国士氏の採集・所有である（4図）。1点のみであるが、頁岩製の見事な尖頭状の削器である。

関沢遺跡（4） 宮中丘陵の北側に接した段丘上に位置する。昭和55年に発掘調査がな



3図 旧石器時代遺跡分布図

番号	遺跡名	遺物 ●…発掘 ○…採集						主要文献
		ナイフ	彫器	搔器	尖頭器	細石器	その他	
1	千 荘	○	○	○	○	○	●	中島庄一 1983 信濃34-4
2	城ノ前				○			高橋桂 1980 新編瑞穂村誌
3	木 原						○	
4	宮 中					○	○	
5	関 沢			●	●		●	飯山市教委 1981 太子林・関沢
6	瀬 付	○				○	○	信濃史料 1956
7	北竜湖				○	○	○	高橋桂 1980 新編瑞穂村誌
8	内 野			○			○	
9	太子林	●	●	●			●	飯山市教委 1981 太子林・関沢
10	屋 株				●		●	飯山市教委 1989 小沼湯滝バイ
11	日 焼	●		●	●		●	イバス関係遺跡調査報告 I
12	上 野	●	●	●	●		●	飯山市教委 1990 同上 II

表1 千荘遺跡周辺旧石器時代遺跡地名表

され、尖頭器を主体とする良好な石器群を検出した（飯山市教委 1981）。

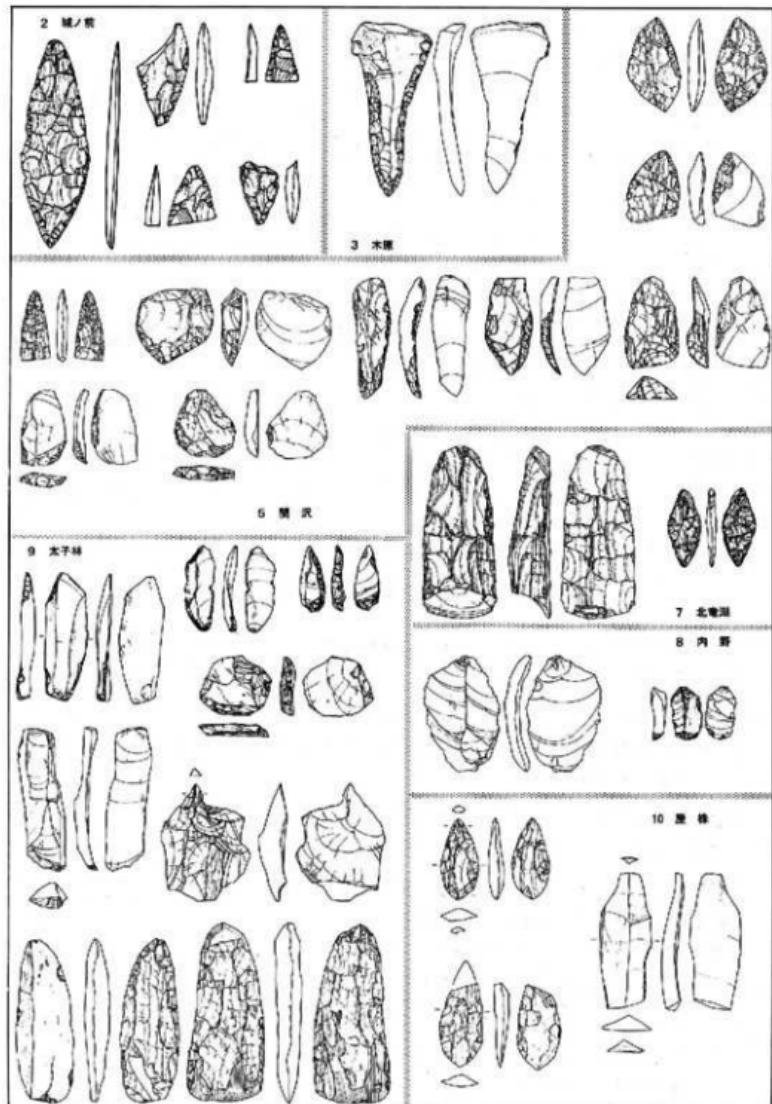
瀬付遺跡（6） 千曲川に接した段丘上にあり、関沢遺跡の対岸に位置する。信濃史料には写真とともにナイフ形石器の出土が記載されているが、資料は現在不明となっている。なお、堤防の土取りによって、主体部は破壊されたと考えられるが、周辺より剝片は現在でも少量採集することができる。

北竜湖遺跡（7） 標高 500 m の断層湖周辺に位置し、盆地底との比高差は 200 m を計る。遺物は大半が北竜湖観光協会に保管され、一部市教育委員会・飯山北高校が所有している。主体は縄文早期・前期の土器・石器であるが、旧石器時代の尖頭器・細石核および縄文草創期の片刃石斧が採集されている。

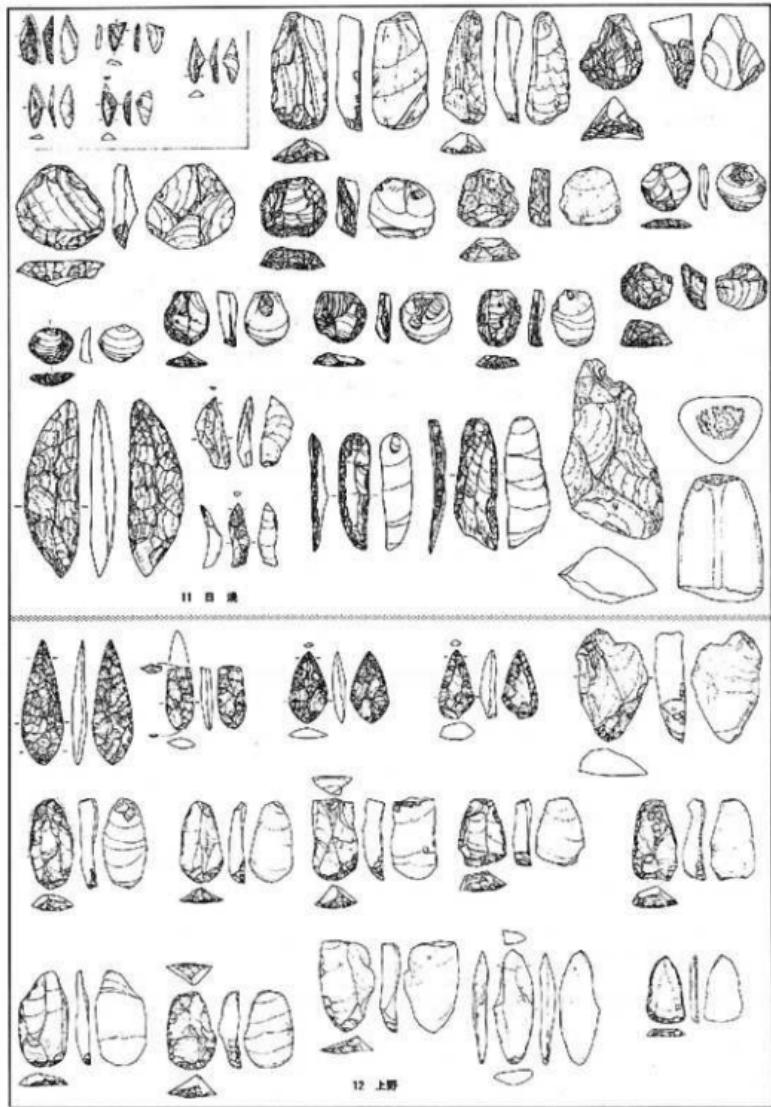
内野遺跡（8） 以前より該期時代の遺跡として登録されていたが、一部石器について実測図を示した。頁岩製の剝片や黒曜石製の搔器が採集されているが、明確な地点は不明である。また、特徴的な石器が少なく時期的な位置についても明らかにできない。

太子林遺跡（9） 瑞穂グラウンドの東斜面に位置し、高位河岸段丘面にのる。関沢遺跡と同一原因により発掘調査がなされ、ナイフ形石器・搔器・彫器・刃部磨製石斧等が発見された（飯山市教委 1981）。

屋株遺跡（10） 1988年、国道 117 号線小沼湯滝バイパス建設にともない調査が実施さ



4図 周辺遺跡出土旧石器実測図 1



5図 周辺遺跡出土旧石器実測図 2

れた（飯山市教委 1989）。平安時代の遺構により遺存状態は悪かったが、小形の尖頭器 2 点および剥片が検出されている。

日焼遺跡（11） 屋株遺跡と同一原因により同年調査が実施された。6か所の遺物集中地点より約2000点の石器が発見され、特に黒曜石製の搔器が注目を集めた（飯山市教委 1989）。

上野遺跡（12） 1989年に調査が実施された（飯山市教委 1990）。総長 500 m の区間ににおいて 5 集中地点、2 磁群を検出している。尖頭器 6 点のほか玉髓製搔器が多量に出土している。

前記11か所の遺跡出土石器群の編年的位置づけについては、ナイフ形石器・尖頭器を指標とするならば、太子林・日焼→関沢・上野とすることが可能である。ただし、尖頭器文化なるものの実態が当地方では明確でなく、加えて縄文時代_後創期の石器群が明らかでない現在においては、もう少し該期時代の動態を探究する必要があろう。

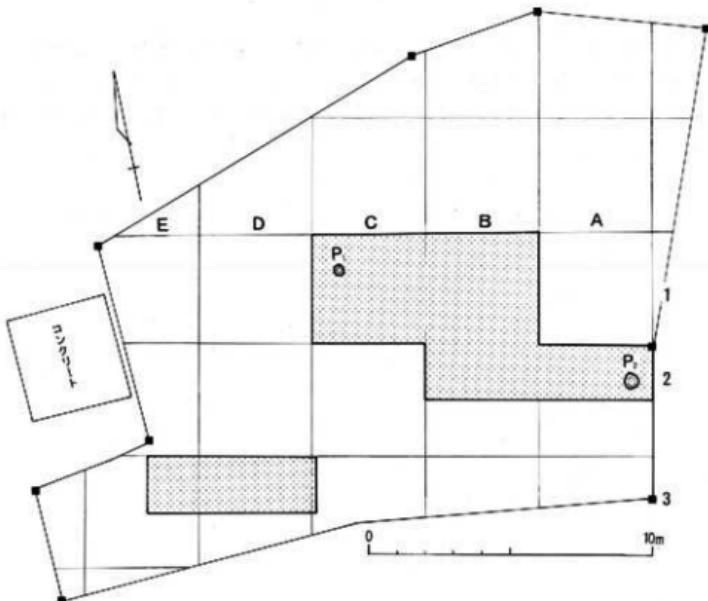
第2章 調査経過

1 調査の経過

飯山市は、平成元年度の事業で、瑞穂地区戸那子において地域改善施設整備事業として市道改良舗装工事を実施することとなった。この事業において、拡幅に伴ない家屋の移転を余儀なくされた一軒が、たまたま遺跡の位置する地籍に建築を計画された。平成元年6月にこの事実を知った市教育委員会は、市同和対策課および7月10日に県教育委員会とも協議をするなかで、中心部より外れているものの範囲内であることにより、事前に発掘調査を実施して記録保存することが妥当との結論に達した。

なお、建築が急ぎであることを考慮し、至急発掘調査を実施することとし、埋蔵文化財発掘通知（98条）を提出した。

経費については、年度途中で国庫補助申請が難しいために、市の単独事業とした。また、すでに実施している他の発掘調査が大規模で調査員の余裕がないことから、教育委員会事



6図 調査区全体図

務局職員1名が兼務することとし、日本考古学协会会员・飯山市文化財保護審議会委員の高橋桂氏に指導をお願いした。

2 調査概要

調査は、平成元年7月24・25日の2日間実施した。

現状は南側に傾斜しており、建物はこの中央部分を掘削して建築し、他は現状のまま乃至盛土するとのことであった。よって、調査部分は掘削部分に限定して行うこととした。

調査方法は敷地境界の東中央杭を基準とし、東南端の境杭を見通してY軸を設定した。一辺4mのグリッドを設定し、第3象限で呼称した。基準杭はA-1・2である。

調査は、炎熱下で行われた。表土より全て人力でB・C-1より着手したが、表土が約15cmと浅く、すぐにテフラ状の黄褐色土となっている。また、黄褐色土層も上面は既に削平されているようであり、耕土との境は明瞭であった。

したがって、黄褐色土上面より剥片が5点出土したものの旧石器時代の包含層は既に破壊されていると考えられた。また、2か所において平安時代のピット状の落ち込みを確認した。また、道路より導入区のD・E-3を調査したが、表土・黒色土は約50cmあったものの南西側に急傾斜となっており、遺構・遺物の出土はなかった。合計調査面積は60m²となつた。

今回の調査地区は、千苅遺跡の西端と考えられる。遺物が多く採集される地区は、東側の東斜面であり、今回の調査個所は南斜面乃至西斜面となる変換点にあたる。したがって、中心部よりややはざれた外郭地帯と考えられる。今後畔上光雄氏宅東側一帯の地区を保存していく必要があろう。

第3章 調査結果

1 旧石器時代

A 遺物の出土状態（7図）

前節で触れたように、包含層は破壊されて無かった。従前の調査においても包含層が漸移層にあると考えられているとの合致する。

遺物は耕作土と黄色褐色土層との境から出土した。原位置とは考えられないが、本地区まで遺跡の範囲があるのは確実であろう。

B 遺物（8・9図）

調査によって5点の石器が出土した（8図）。また、調査期間中の踏査によって6点の石器を採集している（9図）。あわせて説明を加えることとする。

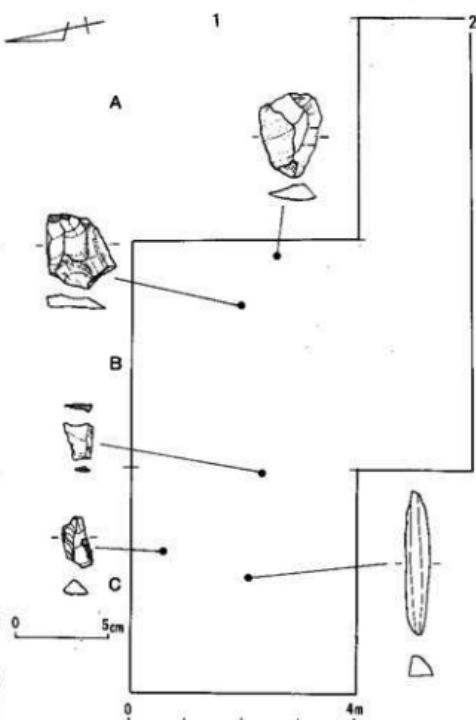
出土遺物（8図）

1 黒曜石製の剥片である。上下端とも破損しており、現存長2.0cm、幅1.5cm、厚0.4cmを計る。両縁片には細かなリタッチが認められ、使用痕と考えられる。

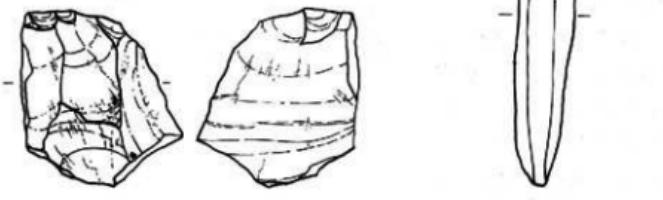
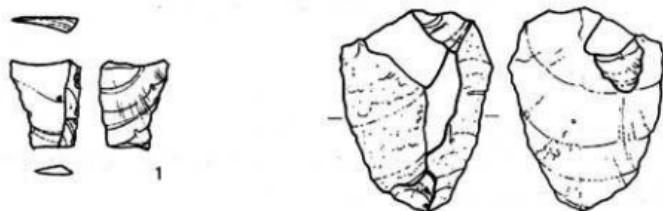
2 1と同様に黒曜石製の剥片である。両縁辺に細かなリタッチが認められるが、正面右側縁の加工痕は明瞭である。現存長2.7cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmを計る。

3 安山岩製の剥片で、表皮を一部残す。現存長4.5cm、幅3.4cm、厚さ0.9cmを計る。

4 正面側は多方向からの剥離面が認められる。安山岩製の剥片で、現存長3.9cm、幅3.6cm、厚さ0.6cmを計る。



7図 旧石器時代遺物分布図 (1:100)

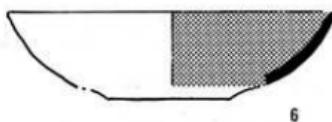


旧石器時代石器

平安時代土器

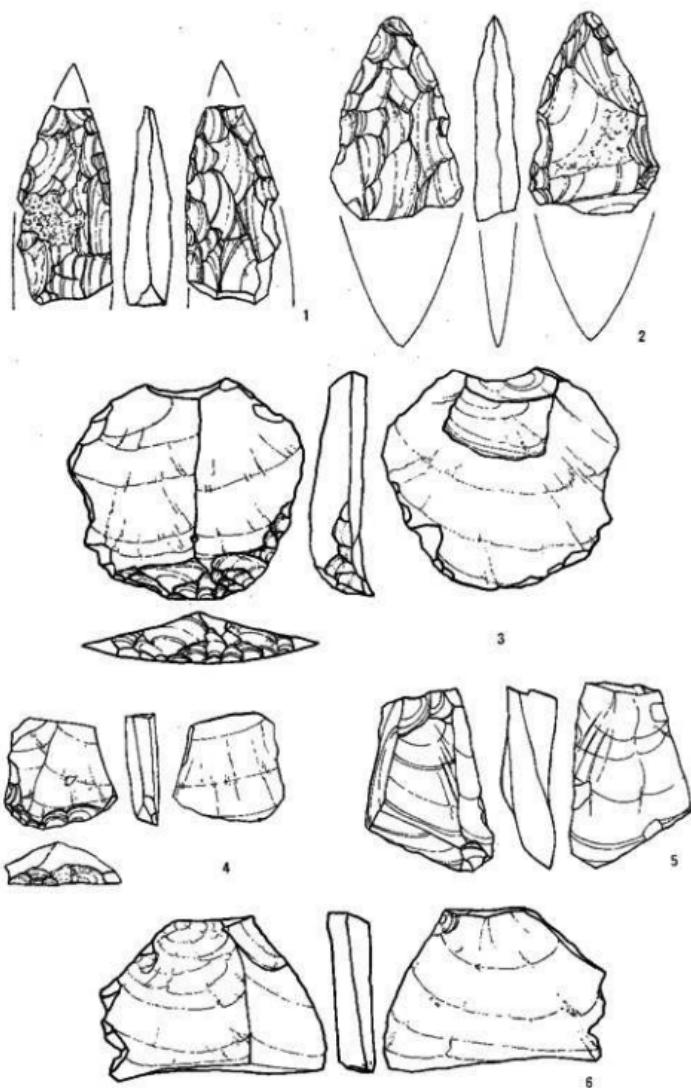
0 5cm

0 10cm



6

8図 出土遺物実測図 (4:5 2:5)



9図 1989年採集石器尖端圖 (2/3)

5 風化により剥離面が全くわからない。図の裏面は破損面である。表面は黄褐色のバテナであるが、断面の中は黒色であり、軟質の頁岩系の石材と思われる。本石質は、千刈遺跡既出資料中にも散見でき、日焼遺跡でも発見されている。石器片であるかどうか不明であるが、搬入石材であることには間違いない。

1989年採集資料（9図）

採集地点は調査区東側の斜面が変換し、東斜面となる地区である。遺跡の中心部であろうと推定されている。合計6点で、内訳は尖頭器・搔器・剝片各2点である。

尖頭器（1・2）

1は先部および胴下半を欠失するが、柳葉形を呈す細身の尖頭器である。現存長5.1cm、幅2.6cm、厚さ1.2cmを計るが、推定約9cmの中形尖頭器と思われる。正面の一部に不純物のブロックがあり、その部分のみ加工は施されていない。他は両面とも丁寧な二次加工が施されている。2は胴下半を欠失するが、最大幅を胴中央部におく菱形を呈する尖頭器であろう。全長9cm前後になろうか。二次加工は全面に施されるが、離面側は大きな平坦剝離を行ったのち縁返のみ細加工を施して形を整えている。1・2ともに安山岩製である。

搔器（3・4）

3は幅広の剝片に、先端部のみに刃部を作出したものである。形状は円形に近い。長さ5.9cm、幅6.2cm、厚さ1.6cmを計る。安山岩製。4は小形の搔器で、長さ3.1cm、幅3.0cm、厚さ0.9cmを計る。基部側は折り取ったものか、破損したものか判然としない。

剝片（5・6）

5は頁岩製の剝片である。正面側は多方向からの剥離面によって形成されている。6は安山岩製で、下半部を欠失する。

以上の採集資料は、既出資料と同様であり同一時期とみなされる。

2 平安時代

A 遺構 (10図)

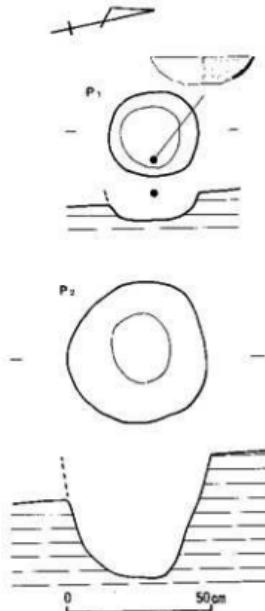
A-2、C-1においてそれぞれ柱穴状の遺構1基を検出した。P₁において黒色土器壺形土器が出土しているので、2基とも平安時代の遺構として報告する。

P₁ C-1区において検出された。径約30cmの円形ピットで、確認面からの深さは11cmを計る。検出面において黒色土器を検出した。出土状態はほぼ正位に置かれた状態であり、耕作により破損したものと考えられる。

P₂ A-1区において検出された。49×51cmのやや歪んだ円形プランを呈する。深さは45cmを測り斜面下の南側は削平されている。出土遺物はない。

B 遺物 (8図)

黒色土器 P₁において唯一検出されたものである。口径14.4cmを計る。口径に比して器高は低い。器表面は赤褐色を呈し、胎土に砂・小石粒が含まれる。内面は黒色で、よく研磨されている。10世紀前半に年代的位置が与えられるであろう。

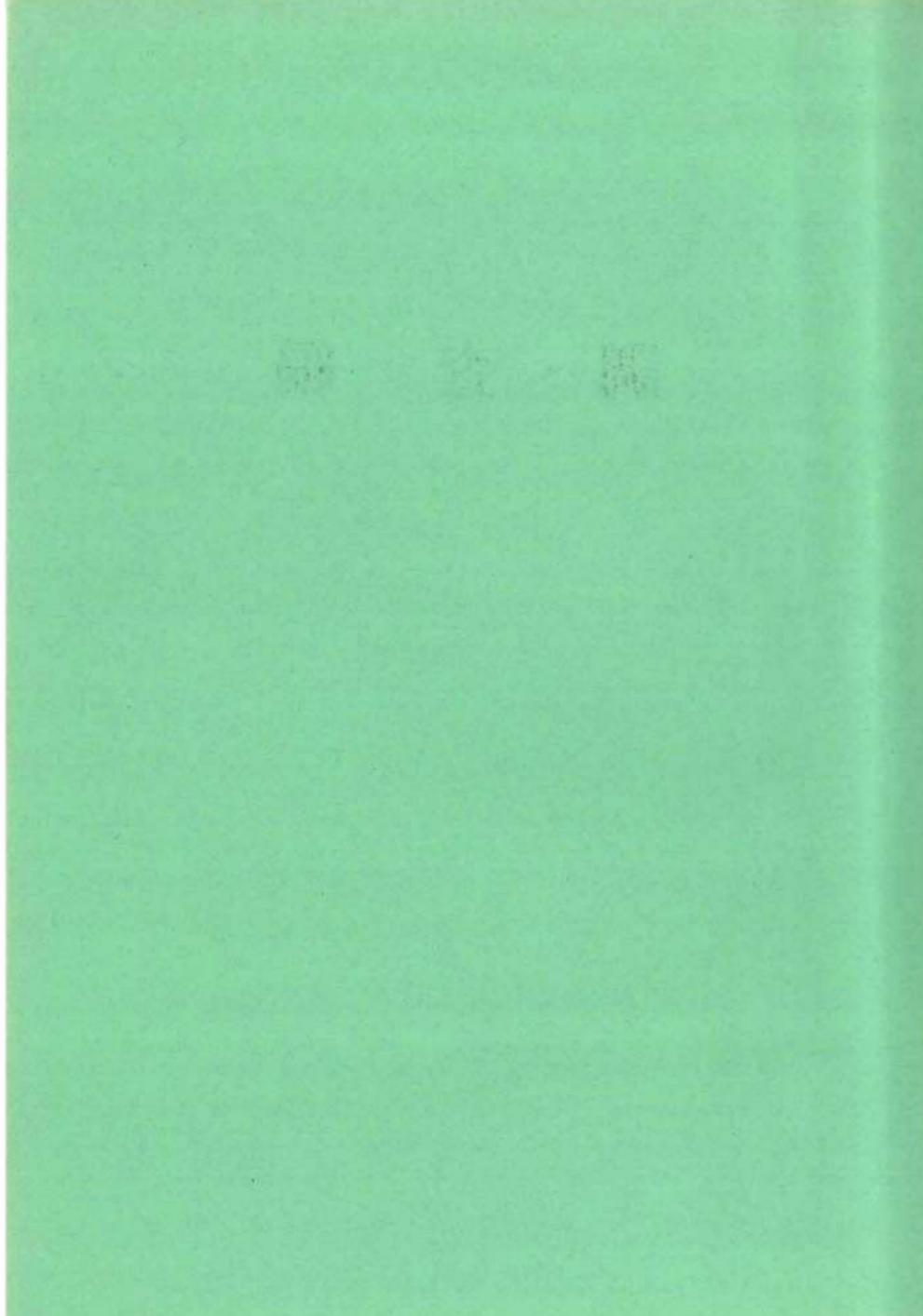


10図 遺構実測図

【引用・参考文献】

- 飯山市教育委員会 1981 「太子林・関沢」
飯山市教育委員会 1986 「飯山の遺跡」
飯山市教育委員会 1989 「小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ」
飯山市教育委員会 1990 「小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ」
信濃史料刊行会 「信濃史料第一巻上・下」
高橋 桂 1980 「瑞穂のあけぼの」『新編瑞穂村誌』 瑞穂村誌刊行会
中島庄一 1983 「北信地域における尖頭器を伴出した石器群について」『信濃』34
- 4
森島 稔 1988 「先土器時代の石器」『長野県史』考古資料編全1巻4

研 究 編



千苅遺跡の既存資料

中島 庄一

1 はじめに

千苅遺跡の既存資料発見の端緒は昭和46年、当時中学生であった畦上直君が自家の畠で採集した資料に始まる。これらの資料は田中清見氏にもたらされ、高橋桂氏の知るところとなつた。資料を実見した高橋氏は直ちに畦上・田中尚氏に案内を依頼し、千苅遺跡を確認したのである。

以来、千苅遺跡は高橋桂氏、県立飯山北高校地歴部の諸兄によって、地道に表面採集が続けられ、ここに報告する資料群として蓄積されたのである。

なお、これらの既存資料についてはすでに報告したが、新資料を含め改めて報告したい。

2 千苅遺跡の石器

(1) 細石刃核 (1図 1~4)

模型細石核に相当すると考えられるものが3点発見されている。

1は細石刃を剥離する打面が二面、模型細石核の正規の打面に相当する部分（A打面）と背面に相当する部分に打面（B打面）が作出されている。A打面は細石核の長軸方向に對して直角の方向から、B打面は細石核の長軸方向に對して平行に細石刃剥離面の方向から作出されている。B打面には更に打面調整剝離と思われる剝離が細石核の長軸に對して直角の方向からなされているのを認めることができる。B打面からの細石刃の剝離は明確に認められないが、細石刃を剥離しようとした痕跡が認められる。しかし、細石刃剝離に成功していない。細石核の側面調整はA打面B打面とも認められる。いずれも、一側面に限られている。

2は模型細石核の素材と考えられるもので、打面が作出される以前のものだと考えられる。表裏に礫面が観察され、その素材が比較的小さな転石状のものであったことが何われる。比較的粗い剝離が両面にわたってなされ、断面が菱型を呈する。細石刃の剥離面に相当する部分にも剝離が認められる。

3は形態的に模型細石核に類似するもので、細石核とする確証はない。打面に相当する剥離面は長軸方向に對して直角になされる。しかし、全く平坦ではない。細石刃の剥離面に相当する部分は背面から直角に剝離がなされている。

4は円筒形を呈する細石核である。わずかに打面の調整が認められる。また、打面の反対側の平坦面からも若干の剝離が認められ、細石刃の剥離が意図されたように見受けられるが、明確ではない。

(2) 尖頭器（2図5～4図35）

尖頭器は大半のものが欠損しているが、推測される平面形態には様々なものがある。木葉形のもの、柳葉形のもの、細身の柳葉形のもの、菱型のものなどがある。基部の形態に丸みを帯びて収束するもの他に、やや内湾するように収束するものがある。また、明確ではないが有舌尖頭器の舌部（4図31）と思われるものがある。

(3) 半月形石器（4図36～39）

4点の半月形石器が発見されている。4図36・37は丁寧に両面加工されている。4図39は粗い両面加工のもので、厚さも厚い。未製品の可能性もある。4図38は半月形石器とするにはやや厚みがありすぎる。一種のサイドスクレイパーと考えるべきかもしれない。

(4) 彫 器（5図40・41）

2点発見されている。5図40は両面加工の尖頭器の先端から斜めにファシットを設けたものである。5図41はやや縦長の厚めの剥片を素材として用い、剥片の長軸に対して側面方向から直角に、剥片を断ち切るようにファシットが二条作成され、更にそれに対して直角に、剥片の長軸方向に平行して、ファシットが作出される。下端にも剥片の長軸方向に対して直角方向に両側面からの剥離が認められ、一側面には上端と同様に剥片の長軸と平行した幅の狭い剥離が確認できる。しかし、確実に彫器のファシットとはなっていない。

(5) 搗 器（5図42～6図52）

縦長の剥片を利用した摗器（エンド、サイド）（5図42～44）及び円形状の摗器、両面加工がされるものの三種がある。また、6図54は平面三角形を呈する独特のもので、わずかに類例を散見する。

(6) 尖頭状削器（6図53・55）

幅広な剥片を素材とし、側縁から平坦な剥離が両面に認められるが、剥離は器表全体を覆うことはない。基部が比較的調整剥離されている。いわゆる尖頭状削器に比較して、幅広な点が異なるが、その範中に含められるものとしておく。

3 千苅遺跡既存資料が提起する若干の諸問題

千苅遺跡の既存資料は楔型細石核、円筒形細石核、木葉形尖頭器、半月形尖頭器、彫器、摗器及び尖頭状削器から構成されている。数量的には尖頭器がその大半を占める。

すでに紹介したように、本石器群は表探によって得られた資料である。したがって、これらの資料群が同一時期の所産であるか否かは判然としない。

一方、これらの石器が大きく旧石器時代の末から縄文時代草創期にかけてのものである

ことには違いない。しかし、その大きなスパンのどの段階に属すると考えられるのであろうか。旧石器時代の末から縄文時代草創期にかけての石器群の変遷段階が明かであれば、千苅遺跡の石器群の位置やそのあり方についても明らかにされうる。しかしながら、裏日本一帯では当該期の層位的に連続する遺跡はなく、層位的な対比も十分でないため、当該期の石器群の変遷は不明確な部分が多く、千苅遺跡の石器群に対する評価も定まらないというのが現状である。

そこで、関東地方等を参考にして、当該期の石器群の変遷を概括し、千苅遺跡の石器群のあり方に対する検討に変えたい。

【石器群変遷の概要】

旧石器時代末から縄文時代草創期にかけての本州の石器群は細石刃石器群の出現を基本に、細石刃石器群以前の段階、細石刃石器群、細石刃石器群以後の段階に区分されよう。これらの石器群の大きな区分を第Ⅰ段階、第Ⅱ段階、第Ⅲ段階と本稿では便宜的に仮称する。

また、これらの石器群のあり方は層位的に対比研究が進んでいる相模野台地のあり方を基本としたものである。おそらく、事実はそう単純なものとは考えられないが、飯山地方を含む東日本一帯の石器群の大局を把握するための一つの作業仮説である。

第Ⅰ段階

細石刃石器群出現以前。関東地方のナイフ形石器を含む石器群の最終段階。小形のナイフ形石器、尖頭器、男女倉型彫器を石器組成とする段階を想定する。相模野台地では上野第1地点第4文化層出土の石器群。下総台地では角田台地遺跡出土の石器群が本段階に相当すると考える。

青森県の大平山元遺跡では大平山元Ⅱc・Ⅲb石器群と大平山元Ⅱb石器群がこの段階に相当する。大平山元遺跡ではⅡc→Ⅱb石器群という前後関係が検討されている。大平山元Ⅱc・Ⅲb石器群は男女倉型彫器類似の両面加工石器、片面加工の尖頭器、縦長剝片を素材とした彫器等から構成される。一方、大平山元Ⅱb石器群は両面加工の尖頭器、ナイフ形石器を母型としたような片面加工の尖頭器、彫器、削器から構成され、男女倉型尖頭器類似の両面加工石器の欠落が特徴的である。

当該期における石器群が大平山元遺跡での発掘所見のように、時間差と考えられる二つの石器群から構成されるかどうかは明確ではない。しかし、男女倉型尖頭器を欠落する尖頭器を含む石器群は山形県越平林遺跡の石器群、新潟県御淵上遺跡の石器群が点在する。これらの石器群は両面・片面加工の尖頭器が主たる構成石器となっており、とくにナイフ形石器を母型としたような片面加工の尖頭器が特徴的である。

一方、茨城県細原遺跡は男女倉型尖頭器、両面加工の尖頭器、彫器、縦型搔器から構成

される。縦長剥片の剥離技術が存在する。また、千葉県角田台遺跡の石器群も同様の石器組成をもつ。両者の石器群では、相模野台地や武藏野台地では認められない縦長剥片の剥離技術を伴う点が注目される。

第II段階

細石刃石器群の段階。相模野台地では細石刃石器群が、代官山遺跡第III文化層の段階→船型細石核・野岳・休場型細石核→野岳・休場型細石核を伴う細石刃石器群と変遷するとされる。これらの細石核はいわゆる楔型細石核こととなり、細石核を製作するブランク両面加工石器を製作する段階を経ないものと考えられる。

一方、東日本では両面加工の石器を素材として細石核を作成するいわゆる楔型細石核を伴う石器群が本段階に相当すると考えている。青森県大平山元IIa石器群、山形県越中山D・S地点、新潟県荒屋遺跡・中土遺跡、茨城県後野B遺跡などが相当する。

なお、相模野台地寺尾第I文化層、上野遺跡第II文化層では細石核と両面加工の尖頭器及び土器が検出され、その伴出関係や編年的位置、系譜が問題となっている。層位的には先述した細石刃石器群の上位にある。

第III段階

神子柴・長者久保系石器群の段階である。この段階は縦長剥片剥離技術を伴う段階と伴わない段階に区分される。

縦長剥片剥離技術を伴う石器群としては青森県大平山元I石器群、越中山A地点、後野B遺跡の石器群が、伴わない石器群としては山形県弓張平遺跡、新潟県本ノ木遺跡、神奈川県寺尾第I文化層の石器群が相当する。

第IV段階

有舌尖頭器を伴う石器群の段階。この段階では、石器を伴わない段階と伴う段階とに区別される。伴わない段階の石器群として、千葉県南浦大袋遺跡、神奈川県上野遺跡第II文化層、新潟県中林遺跡、田沢遺跡などがあげられる。隆線文系の土器群を伴う。

【千苅遺跡の石器群の位置づけ】

おそらく、千苅遺跡の石器群はこのように区分した場合、第III段階の縦長剥片剥離技術を伴わない神子柴・長者久保系石器群の段階に相当するものと判断される。とすると、これらの石器をすべて第III段階の後半の時期に相当すると考えて良いであろうか。

細石刃核と尖頭器の伴出関係の是非が問題となる。千苅遺跡の細石核には円筒形—おそらく野岳・休場型細石核の系統のものと、いわゆる楔型細石核がある。細石刃石器群は第II段階であり、第III段階の後半とは時間的にかなりの隔たりがあるものと考えられる。

したがって、千苅遺跡の石器群のうち細石核を第II段階に、その他の石器を第III段階に相当するものと考えるのが、現時点では最も妥当な見解であると思われる。

しかし、寺尾遺跡第I文化層や上野遺跡第II文化層における伴出関係を積極的に評価した場合はどうであろうか。まず、これらの細石核が野広・休場型細石核の範疇にはいらず、しかもそれより新しい層順で検出されている点は注目されよう。

そして、次に後野遺跡A遺跡及びB遺跡の時期的な問題である。報文によれば、A地区及びB地区両者にかけて認められる個体別資料No.16がある。これをどう評価すべきか問題となる。筆者はこの事実は両遺跡が同一時期の所産であることを示していると考えるのが自然であるように思う。とすれば、第III段階の縦長剝片剥離技術を伴う神子柴・長者久保系石器群と両面加工の石器を素材として細石核を用意する細石刃石器群（第II段階）が同一時間帯にオーバーラップする可能性も否定できない。

このように考えると、相模野台地や武藏野台地で確認されている石器群の変遷と比較すると、いわゆる細石刃石器群が一段階程度新しい段階に存在していることになる。この考え方の正否は更に発掘調査の成果を待たなければならない。しかし、こう考えると神奈川県寺尾遺跡第I文化層や上野遺跡第I文化層の細石核の理解の途が開かれるかも知れない。

また、東日本には縦長剝片剥離技術が第I段階から第III段階の前半にいたる間存在している。この縦長剝片剥離技術は東日本から東北、北海道にかけて分布し、大陸にまで分布していることが予想される。いわゆる楔型細石核を伴う石器群は大陸→北海道→本州と分布を拡大してきたと予想され、それらの石器群には縦長剝片の剥離技術や両面加工石器が認められ、単に細石刃のみで構成されていない。中土遺跡や荒屋遺跡においても細石刃石器群と縦長剝片剥離技術が認められている。

この縦長剝片剥離技術を中心に考えると、茨城県細原遺跡・千葉県角田台遺跡（第I段階）—新潟県中土遺跡・荒屋遺跡（第II段階）—茨城県後野遺跡・縦長剝片剥離技術を伴う神子柴・長者久保系石器群（第III段階）と段階をおって、連続的に認められる。こうしたあり方は相模野台地や武藏野台地の石器群のあり方とその様相を異にする。

中部地方北半の石器群のあり方はこうした北回りのルートで波及する石器群と関東地方に認められるような石器群が相互に干渉し合った様相が認められる。こうした地域的なあり方の一つとして飯山地域の旧石器時代の末から縄文時代草創期にかけての石器群が存在するように思える。

4 まとめにかえて

千苅遺跡の既存資料は神子柴・長者久保系石器群の後半、縦長剝片剥離技術を伴わない段階の石器群と位置づけられよう。その場合、細石刃核が同一時期の所産であるかどうかという問題がある。

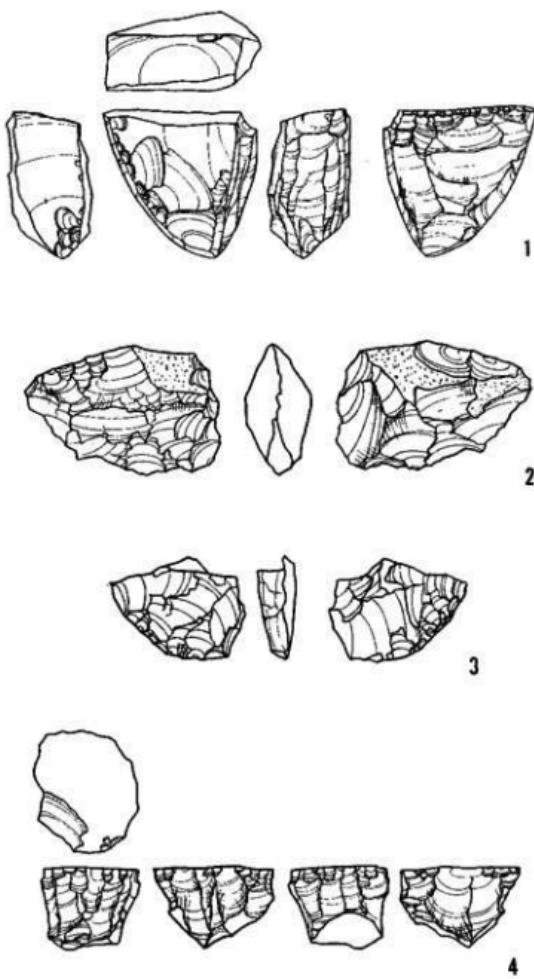
現時点では細石核と尖頭器は分離して考えるのが妥当といえるが、この見解は関東地方

を中心としたものであり、単純に中部地方の北半に適用出来るかは、まだ検討の余地があろう。少なくとも、北海道、東北にかけて分布する関東地方とはその趣を異にする石器群の系譜が明らかにされる必要があろう。IH石器時代末から縄文時代草創期にかけての石器群の変遷過程は流動的であると考える。

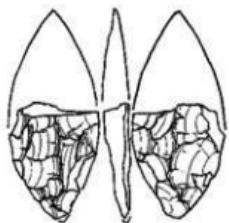
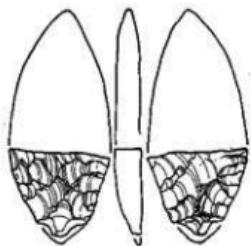
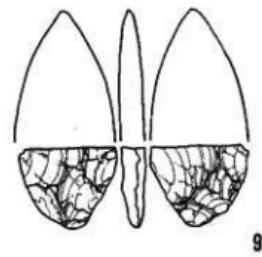
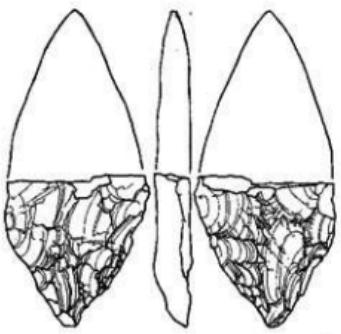
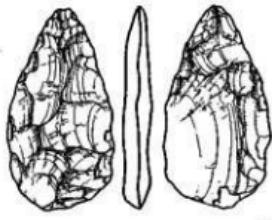
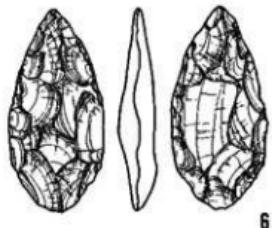
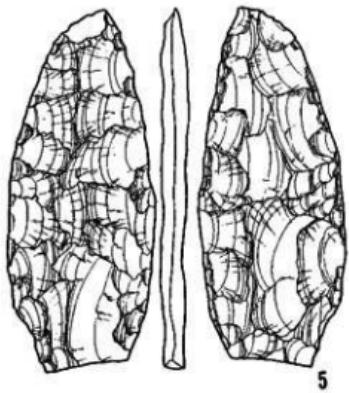
こうした石器群の系譜の問題は日本旧石器時代のあり方、縄文文化の成立の問題となげかける問題は大きい。飯山地方におけるIH石器時代の石器群の変遷段階が明らかにされれば、こうした問題にある方向性を見いだす可能性がある。

【引用・参考文献】

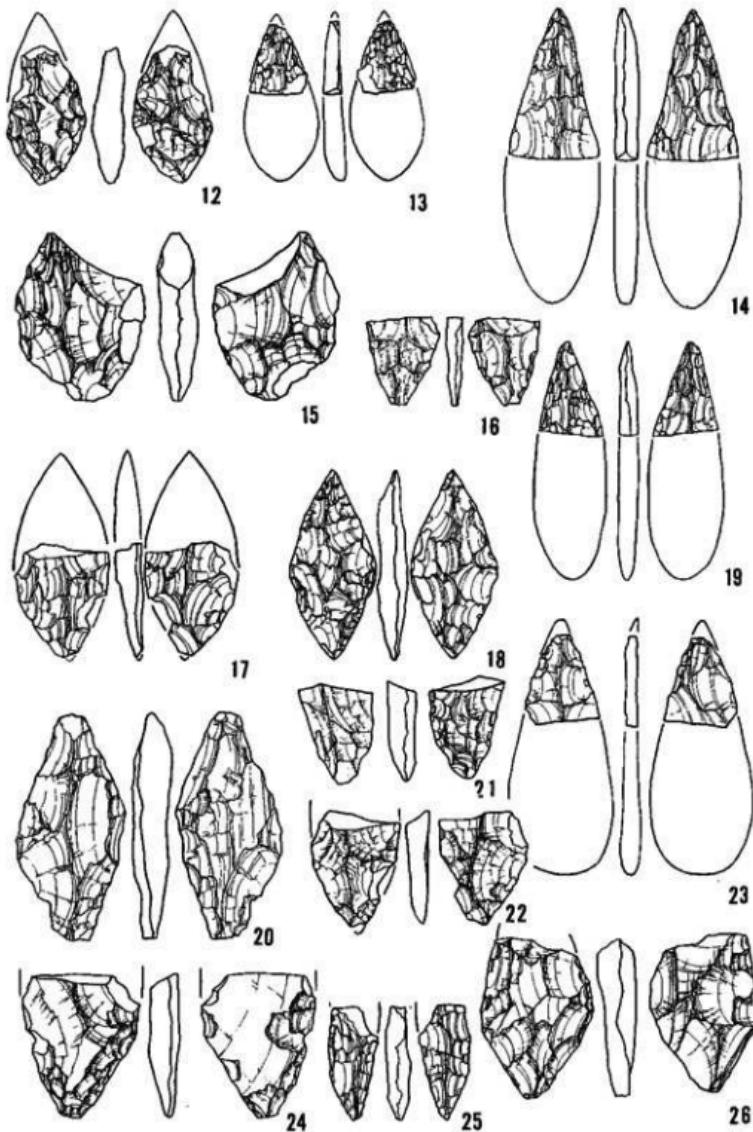
- 1 安藤政雄 1979 日本の細石核／特集日本の細石器文化の研究 駿河史学47
- 2 伊藤恒彦 1988 相模の台地の2種類の尖頭器石器群／大和のあけぼの 大和市教育委員会編
- 3 加藤稔 宇野修平 渋谷孝雄 1974 越中山A'地点第一次発掘調査略報／朝日村教育委員会
- 4 加藤稔編 1972 上屋地遺跡 山形県飯豊町上屋地遺跡A地点第1次発掘調査報告
- 5 館野孝 1982 細原遺跡／北茨城市史別巻
- 6 三宅哲也 1980 大平山元III遺跡発掘調査報告書／青森郷土館調査報告書
- 7 三宅哲也 岩本義雄 1976 大平山元I遺跡発掘調査報告書／青森県立郷土館調査報告5
- 8 千葉県埋蔵文化財センター 1984 房総考古学ライブライマー
- 9 中村喜子代重 1988 大和市の先土器時代遺跡展望／大和のあけぼのII 大和市教育委員会編
- 10 白石浩之 1988 縄文文化の起源を求めて／大和のあけぼの 大和市教育委員会編
- 11 白石浩之 1980 寺尾第I文化層／寺尾遺跡 神奈川県埋蔵文化財調査報告18
- 12 鈴木忠司 1988 上野II文化層の位置づけをめぐって／大和のあけぼの 大和市教育委員会編



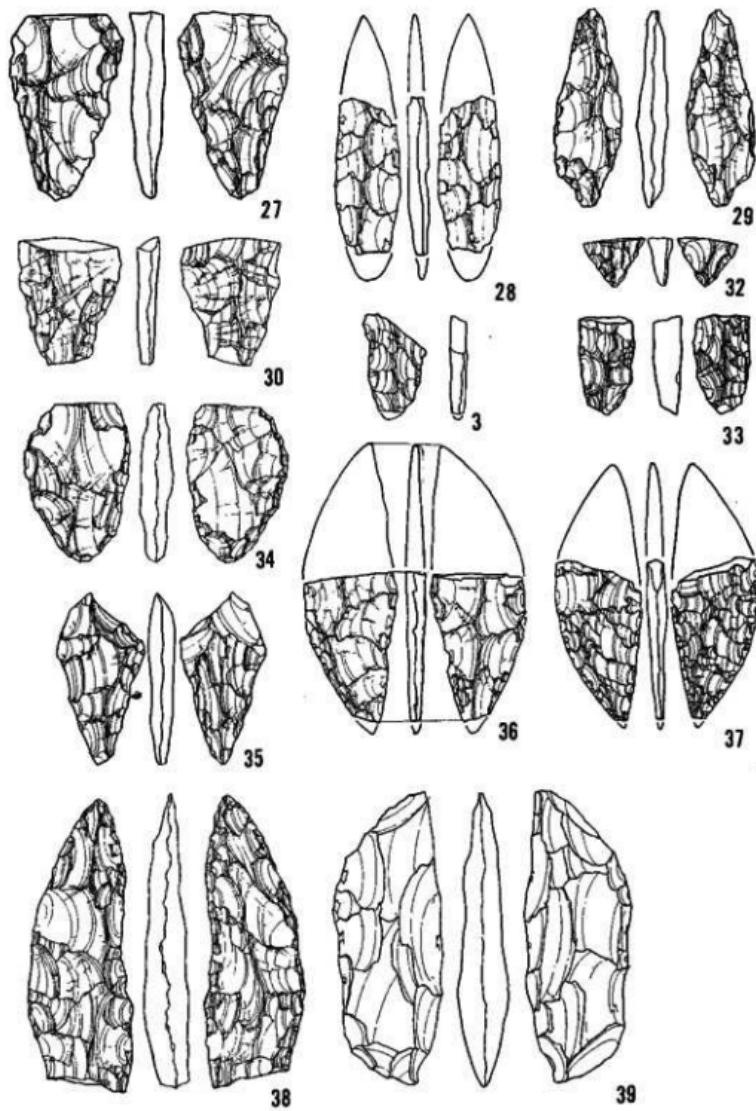
1図 既出石器実測図 1 (S=2/3)



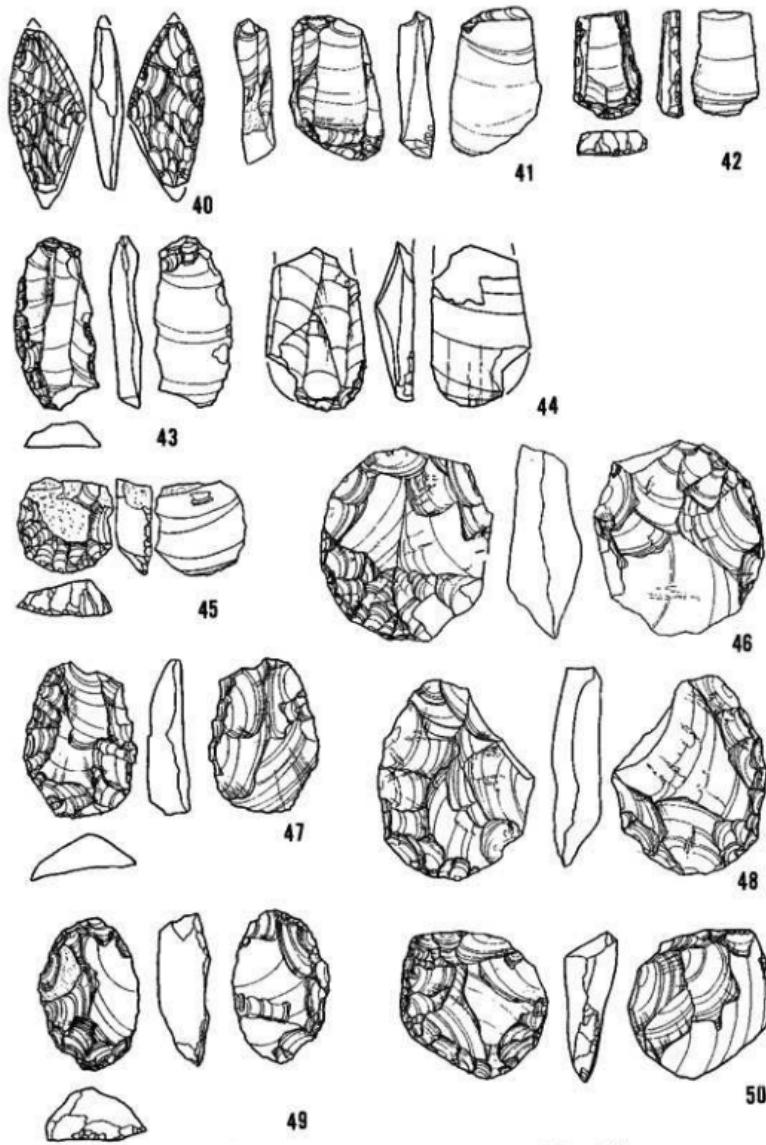
2図 既出石器実測図 2 (S = 1/2)



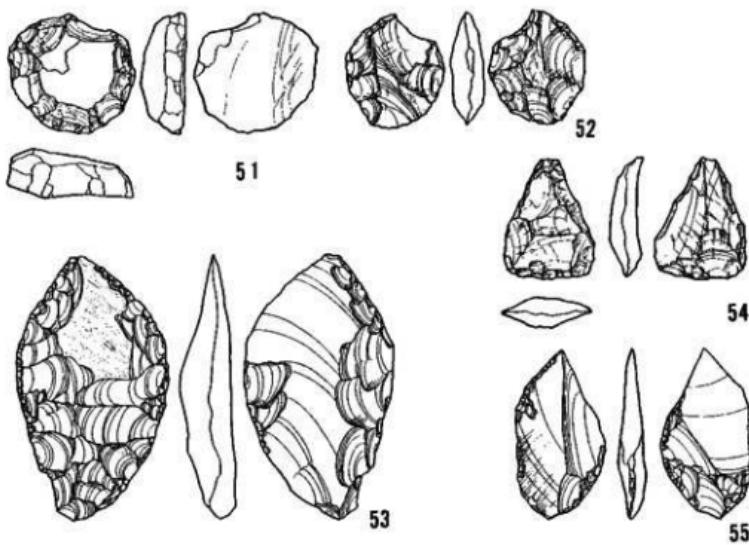
3図 既出石器実測図 3 (S=1/2)



4 図 既出石器実測図 4 (S = 1/2)



5 図 既出石器実測図 5 (S=1/2)



6図 既出石器実測図 6 (S = 1/2)

結語

千苅遺跡は、先記したように畔上直氏によって発見された。私達がその存在を知ったのは、畔上氏をよく知っておられた田中清見氏の紹介によってであった。畔上氏宅を訪れた私達は採集された多量の石器類を拝見し、器種の多様さと石器の素晴らしい驚きを禁じ得なかった。遺跡の畔上氏屋敷畠に案内して頂きそこで何点かの石器を採集した。その後たびたび遺跡を訪れたが、そのたびごとに数点の石器類を採集し、遺物の豊富さに感激すると同時に非常に良好な旧石器時代の遺跡であることを改めて確認したのであった。

近時、飯山地方では開発が急速に進行している。それに伴なって調査数の増加が著しく最早や対応しきれない状態となっている。まさに憂うべき状況なのである。調査数の増大によって旧石器時代の遺跡数も飛躍的に増加した。すでに飯山市内だけでも旧石器時代の遺跡数は40箇所以上である。まさに旧石器時代の宝庫といってよいであろう。中でも飯山盆地北部の瑞穂地区と常盤地区的千曲川の段丘上に集中の度合いが今の所顕著である。いうまでもなく千苅遺跡もその中に含まれている。遺跡数の増加とともに出土した石器も夥しい。これ等の石器については、望月静雄が鋭意究明をつづけ、飯山地方の旧石器時代の編年編成試案を提示している。それによれば、千苅遺跡出土石器は旧石器時代の終末に位置し、土器の出現も予想し得るとしている。

石器を詳細に観察した中島庄一は、「表探による資料であり、果して資料が同一時期の所産であるか否かは判然としない」としながらも細石刃石器出現を基本にすべて、旧石器時代終末段階に位置づけている。両氏の見解は表現の違いこそあれ、千苅出土石器が旧石器時代終末期所産の石器であるという点では共通している。

いずれにしても出土石器群が、発掘調査によったものでなく表探資料である点に大きな問題を残している訳である。しかしながら本資料は、旧石器時代終末期に位置づけられる重要な資料である点にはかわりない。じっくりと腰をすえ他地域の該種石器と比較検討しつつ究明してほしいと切に企願する次第である。

畔上直氏が採集された全ての石器は、氏のご好意により飯山市教育委員会に寄付していただきいた。氏の埋蔵文化財に対する深いご理解に改めて感謝の念を捧げる次第である。

最後に炎暑の中、調査にご協力いただいた作業員のみなさんに心より御礼申し上げる。



千葉遺跡近景（東南より）



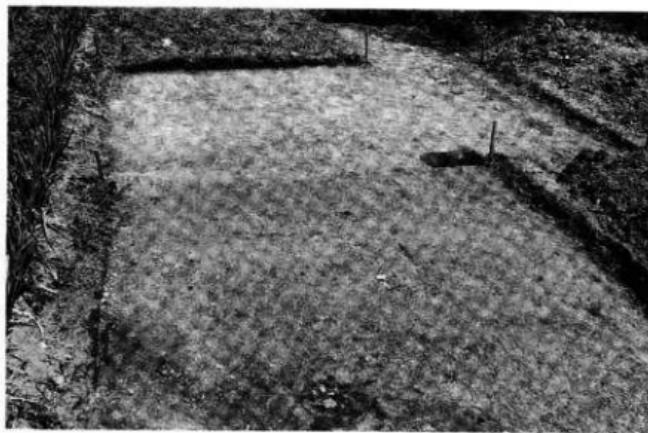
調査風景（西より）



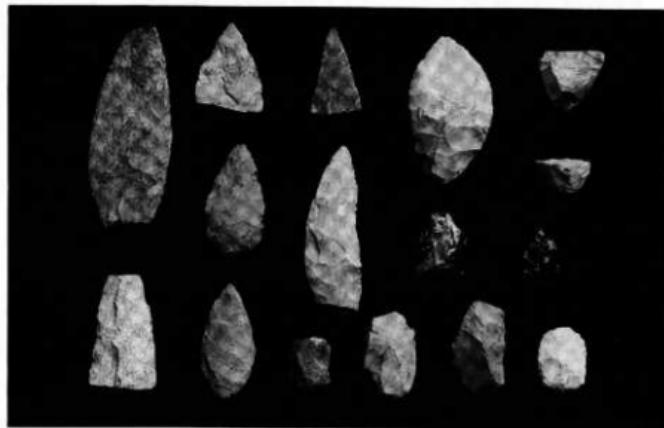
平安時代の遺構（P₁）



平安時代の遺構（P₂）



調査区全景（西より）



既存資料

飯山市埋蔵文化財調査報告 第22集

千苅遺跡の研究

平成2年3月25日印刷

平成2年10月25日発行

編集 飯山市教育委員会

発行 飯山市大字飯山1.110-1

印刷 岬足立印刷所

飯山市大字常郷581-1

